

## 「自転車通学で知った大切な交通安全」

富田中学校 一年 中村 創

ぼくは今年の春、中学生になりました。小学校より通学距離が長くなるため、自転車通学に挑戦してみたいと家族に言いました。両親は「うーん」と悩みました。それはぼくに「自閉スペクトラム症」という障害があるからです。家族と一緒に自転車に乗っていたけれど、ぼく一人で通学ができるのか、すぐには判断できないようでした。それで中学校に入学する前から練習を家族と一緒にして、安心できる自転車の運転をぼくができたと、父、母、姉の三人が合格を出したらしいということになりました。

なぜ家族がすぐに自転車通学を許してくれなかつたか。それは自転車はとてもスピードが出る車両だということ。これまで、自分は車にひかれる立場だったのが、誰かにけがをさせたり、大きな事故に巻き込まれる可能性があるからでした。その話を聞いたとき、少し怖くなつたけれど、自分が自転車で一人で学校に通いたいという気持ちは変わらなかつたので家族の許可が下りるまで練習することを決めました。

まずはどんなルートで行くかいろんな通学路を実際に自転車や徒歩で確認し、自分にとって危険の少ない行き方を決めました。そして、坂道や橋など自転車を降りて押して歩く場所を決め、その通学路を毎日家族の誰かと一緒に自転車で走る練習をしました。実際にやってみると信号機のない横断歩道や、細い路地、カーブ、スピードが出過ぎる場所など家族から注意を受けるところは沢山あつて、安全に自転車に乗る難しさを知りました。

中学に入学してもぼくの家族との自転車練習は続きました。歩いていると、自転車で通学している子がうらやましく思つたり、くやしい気持ちにもなつたけれど、地道に練習を続けました。入学して一か月半、家族全員が「もう安心だ」と言ってくれたときは本当にうれしかつたです。練習を見守つてくれた家族のためにも安全運転に気をつけて、胸を張つて自転車で一人で通学しています。

自転車通学にチャレンジしたことでの、交通安全について家族と話すことも増えました。

ぼくの親せきは、十年前にバス停に向かつて歩いている時、後ろから歩道に乗り上げてきた車にしよう突されて亡くなつたそうです。避けられないこともあるけれど、一人ひとりが気をつけることで事故はもっと減らせるはずだとお母さんも話していました。「気をつけてね」は、見送ってくれるときの合言葉です。ぼくは発達障害がありますが、その分何度も確認したり、スピードや周りの人に注意することはしています。いろいろな人が社会の中で生きているので、交通安全もお互いが思いやりを持たなければ事故は減らないと思います。ぼくも天候が悪いときは無理せず歩いて学校へ行きます。これからも優しい運転で自転車に乗つて学校へ通いたいです。